

## 新連載

「自転車の歴史と交通教育」

〈 第 2 回 〉

「英国サイクリング文献との出会い」

片山 昇

(交通教育 NPO OSCN じてんしゃスクール代表)

### ～私的自転車史のルーツ～

前号の第 1 回では「私的自転車史」を記述した。1960 年代以降の日本の自転車風景を振り返って見たが、その大部分は、私が生まれる半世紀以上前の英国やフランスなどで開花し、世界に伝播した自転車文化にルーツを認めることができる。

私が児童期に乗っていた自転車の構造は、英国で 1880 年代にジョン・ケンプ・スターレーの構想により誕生した「セーフティー型自転車」(※1) がさらに進化し、1900 年代初頭から英国で流行した「クラブモデル (※2)」等にその源流が伺える。

昭和 40 年頃、日本の少年の心を捉えたフラッシュ付自転車。その「セミドロップ型ハンドル」(※3) は、国内の小中学校での「ドロップ型ハンドル禁止」の影響を受けた経緯もあったようだが、その形状は、1920 年代の英国サンビーム社等数社のクラブモデルに採用されていたハンドルに酷似している。それらが原型となった可能性も高い。

また、中学生の頃に乗っていた車種「ランドナー」は伝説の「Randnnee」に由来し、フランスでデザインや機能が熟成された小旅行用のサイクリング車を意味する。前号で紹介した鳥山新一氏が、その仏式車両とサイクリングスタイルを日本に広め、1960 年代前後の日本で流行った。

### ～産業革命と自転車～

英国では、日本より半世紀以上も早く自転車が文化的・社会的な乗り物として位置づけられていった。貴族の娯楽としての乗り物から、庶民の交通手段やスポーツへ。また、木づくりの工芸品から金属製の工業製品へと変化を遂げていく。

量産体制を軌道に乗せたのも英国である。英国ブランドの自転車を、日本を含む世界に向け輸出していく。自転車の誕生史において同様に名前の上がるドイツやフランスを差し置く勢いであった。「自転車はドイツで生まれ、フランスで育ちイギリスで成長した」と角田安正氏は著書「自転車物語スリーキングダム」(2014 八重洲出版) の中で述べている。

この英国の著しい成長のエネルギーこそが、18 世紀中盤から 19 世紀初頭、蒸気機関を動力源とした産業革命である。世界各地の植民地における交通手段。そして、英国国内でも、庶民の足としての自転車の普及が進んだのである。

体育とスポーツの図書館には、この辺りの様子が記された貴重な蔵書が 2 つある。

### ～19 世紀末頃の英国自転車史 2 蔵書～

いずれも、今から 100 年以上前の著作である。歴史の流れに沿って紹介すると、1 冊目は、「The Badminton Library of Sports and Pastimes」叢書 (1885-1920) の「Cycling」(第 5 版、1896 年)。

2 冊目は、「サイクリング・ユートピア フランクパターソン画集」(2013 年、文遊社)。ペン画。1890 年頃から 1950 年頃の約 60 年間にわたり、英国の自転車にまつわる風景が描かれている。

今回は「The Badminton Library of Sports and Pastimes」叢書「Cycling」(第 5 版 1896) の概要を紹介する。



「CYCLING」序文の挿絵より BADMINTON HOUSE (※4)

### ～「Cycling」(5 版 1896) を収める「The Badminton Library of Sports and Pastimes」叢書～

この叢書 (シリーズ全 33 巻) は、スポーツ愛好家であった英国のビューフォート公爵「Henry Somerset, 8th Duke of Beaufort (1824-1899)」の企画監修によるスポーツ事典だ。巻頭には、英国王室に極めて近い立場の者として、皇太子への献辞が掲げられている。

伝統的スポーツとして取り上げられることも多い「狩猟」から、「馬や馬車」、「ボート」、「登山」、「ゴルフ」等の新スポーツ。やがて、「馬や馬車」にとって代わる「自動車」まで、およそ 30 年以上に渡り、幅広い娯楽的スポーツを取り上げ解説している。各ジャンルは、その道の専門家が執筆に携わっている。

「Cycling」の巻の執筆者は 2 名である。一人は、著名な自転車レーサー。もう一人は、軍歴もある元政治家 (後に伯爵) で、挿絵も担当している。

この叢書が出版された 19 世紀の英国は、60 年という長きにわたるヴィクトリア王朝下にある。産業革命による経済活動の発展と共に、様々な芸術やファッション、そして新しいスポーツも開花した時期である。ヴィクトリア女王も、大人用 3 輪車を購入し、女性サイクリストのファッションリーダーとなったという史実もある。

この叢書シリーズ巻頭には、「DEDICATION TO H.R.H. THE PRINCE OF WALES」の記述があるものが多い。これは、当時の皇太子の「Albert Edward」(1841-1910) へ忠誠を誓い、出版されたことを意味する。

皇太子時代が長かった彼は、スポーツ好きであったことでも知られている。1901 年、女王の崩御を受け、彼は英国王となる。

その前、1899 年には当叢書の出版人であるビュー

ーフォート公爵が他界した。その影響からか 1902 年出版の「MOTORS AND MOTOR DRIVING」(自動車と操縦)には、皇太子への忠誠を誓うといった巻頭言は無くなっている。

なお、この叢書のシリーズタイトルの「Badminton」は、ビューフォート公爵所領の地名に由来する。現在もその邸宅は、「Badminton House」と呼ばれている。(邸宅が叢書の PREFACE に描写されている) ※4)

蔵書の「Cycling」は、1896 年出版の第 5 版であり、初版は 1887 年となっている。およそ、1887 年の初版から 1896 年の 5 版に至る 10 年間、先述のように英国自転車史の中でも自転車の構造や楽しみ方の変化が極めて激しかった時代に改訂が重ねられた訳である。この辺りの様子が、当時の著名な挿絵画家「S. T. Dadd」等により、ペン画として適所に挿入されており、往時の自転車文化の状況理解を深めるのに役立つ。

また、当叢書中の 1902 年出版の「Motors and Motor Driving」の序文には「GOLF and CYCLING had attained such extraordinary prominence and popularity～」という記述がある。他編の編集者の言からも、当時、如何に自転車が大衆から大きな支持を集めていたかを伺い知ることができる。

今回は、この叢書の成り立ちと「CYCLING」編誕生の社会的背景の紹介にとどめ、内容については、次回以降に紹介したい。

また、この第 5 版に渡る改訂の詳細については坂元正樹「バドミントン叢書『自転車』における改訂箇所についての考察」(京都大学 2012)でも詳しく述べられているので参考にして頂きたい。



「CYCLING」 p238 より DANGER BOARD 絵 S.T.Dadd (※5)

### ～交通ルールの誕生～

当時の大人にとって、自転車乗車は、未知の体験。2 輪だけでなく、3 輪や変形 4 輪の自転車も多く存在した。安定した乗車と乗車時のファッション性を追求した結果だった。

産業革命は、交通手段に大きな影響を与え、自転車が普及し、蒸気機関に加え、エンジンやモーターの開発も進み、馬車や自転車から派生したような自動車の開発と普及も進んだ。結果として交通環境は混沌としていく。

そして必要に迫られて、交通ルールや標識が定められていったのであろう。この辺りの交通環境の変遷と混沌の描写は、2 蔵書のみならず

「The Badminton Library」叢書中の「Driving (1890)」(馬や馬車の運転)や「Motors and Motor Driving (1902)」(自動車と運転)からも読み取ることができる。

かの夏目漱石も、1900 年に留学先の英国で「自転車日記」なるものを書いていて、当時の英国ではサイクリングが流行していて、「下宿の婆さんにすすめられ、気分転換のために自転車乗りの稽古をさせられた」とこぼしている。初体験の「セーフティー型自転車」を相手に、文字通りの「七転八倒」した様が描かれている。

漱石曰く、「・・・然るにハンドルなるもの神経過敏にて、こちらへ引けば股にぶつかり、向こうへ押しやると往来の真中へ駆け出そうとする。・・・」操縦に苦労した様子がわかる。

また、往来の巡査からは、「此処は馬の通るところだから他所でやれ」と注意されもし、「曲がる時の手信号やベルを鳴らすなどのルールについても無知だった」と嘆いている。

漱石の記述から、すでに英国の交通社会では自転車を含めた交通ルールが確立し始めていた様子が伺える。

さて、今から数年前に、私が欧州の国々の路上でよく目にしたのが、自転車乗りのルールを遵守して整然と走行する姿や、手信号を出して右左折する颯爽とした姿である。

100 年以上も前の蔵書からも、自転車の普及に伴い、交通社会での自転車のルールも誕生し、定着してゆく様子が、読み取れるのである。

### ～次回予告～「自転車に乗れますか？」

そもそも不安定な 2 輪車を、大人がどのように乗り始めたのか。「Cycling」執筆者 2 名の紹介とパターンソン画集の紹介を中心として記したい。

～ 参考文献 (文章中記載外) ～

- ・「The Dukes」(Brian Masters 著 2001 PIMLICO 出版)
- ・Encyclopedia Britannica 「Edward VII」
- ・「十九世紀イギリス自転車事情」(坂本正樹著 2015 共和国出版)
- ・「The Victorians and Sport」(Mike Huggins 著 2004 Hambleton and London)
- ・「A VICTORIAN CYCLIST ～Rambling through Kent in 1886～」(Stephen & Shirley Channing 著 2011 Ozaru Books)
- ・「サイクリング事典 第五版」(鳥山新一著 1981 ベリかん社)
- ・「自転車完全マスター③自転車の歴史と文化」

(2012 ベースボールマガジン社)

- ※1：1870 年代のだるま自転車(オーディナリー型)から進化して、ペダルとチェーンにより、走行性能が飛躍的に増した。
- ※2：英国発祥のスポーツ車の名称。サイクリングクラブでのロードレース練習の為に「クラブラン」に由来する。
- ※3：男性の「カイゼルひげ」の形状に似ていることから「Moustache Bar」と呼ばれることもある。
- ※4：現在も公爵家が住んでいるが、近年、「Badminton Estate」として様々なイベントにも活用されている。  
www.badmintonestate.com
- ※5：危険標識である。標識(板)には「TO CYCLISTS This Hill is DANGEROUS」と書かれ、自転車から降りて押し歩くことを示唆する。当時は下り坂での転倒事故も多かった。